

このひと

日本分析化学会会長に就任される

中 村 洋 氏

(Hiroshi NAKAMURA
東京理科大学薬学部教授)

1968年東京大学薬学部卒業。1970年東京大学大学院薬学系研究科修士課程修了。1971年東京大学大学院薬学系研究科博士課程中退後同大教務職員。1973年同大薬学部助手。1974年薬学博士(東京大学)。1974年-1976年米国NIH留学。1976年東京大学薬学部復職。1986年同大助教授。1994年東京理科大学薬学部教授。1996年同大薬学部長・研究科長。1996年-2002年同大評議員, 2005年-2008年同大理事。この間, 本会筆頭副会長, 関東支部長, 庶務理事, 「分析化学」及び「Anal. Sci.」編集理事, ICAS 2001組織委員会副委員長等を歴任。1979年日本分析化学会奨励賞, 1998年日本分析化学会学会賞受賞。

中村 洋先生は2009-2010年度の本会会長に就任されることになりました。私は学会活動を通じてこれまで中村先生に長年親しくお教えいただいている者です。若輩ですが先生が来年度から会長になられるということで、ここに先生のご業績とこれまでの学会でのご活躍を紹介させていただきます。

中村先生は、東京大学薬学部及び同大大学院を通じて田村善蔵教授のご指導のもとで生体微量成分の分析を駆使した研究に励まれ、「ピフィズ菌の腸内増殖に関する基礎検討」という題名で薬学博士の学位を取得されました。その後、米国のNational Institutes of Health (NIH)に2年間留学され、帰国後もさらに生体成分の新しいクロマトグラフィーの開発に精進されました。これらの成果により1979年には「生体成分の微量分析法の開発」で日本分析化学会奨励賞を、また1998年には「生体成分・医薬品の高感度高選択的分析法」で日本分析化学会学会賞を受賞されました。その後今日に至るまで、多くのクロマトグラフィーを研究され、新しい充填剤や前処理法等の開発に邁進されてこられました。従来分析不可能な生体成分の分析を幾つも可能ならしめてこられたわけですから、単に先生個人の研究業績というだけではなく、社会への研究成果の還元と分析技術の普及や人材育成を通して、まさに日本における分析化学の存在感を大いに高めていただいたということが、中村先生の功績の中の重要な部分であると思います。筆者はクロマトグラフィーの専門家ではありませんが、何度か先生の講演を拝聴させていただき、チタニアを充填剤とするクロマトグラフィーの講演には強い感銘を受けたことを記憶しています。新しい金属酸化物の表面特性を分離分析に利用されたわけですが、基礎化学としての斬新さと



応用価値の高さが相まってすばらしい研究だと思いました。東京理科大学に移られてからは、クロマトグラフィーのみならず遺伝子型の鑑定や診断にも力を入れておられ、マイクロチップタイプの電気泳動を用いた遺伝子診断等により疾病や生理活性物質、薬物、その他多くの生命関連現象の解析を進めておられます。

中村先生は薬学部の先生ですので、常に社会が必要とする分析法や分析対象物を念頭において教育、研究を進められています。たとえば新規美白成分や発毛阻害物質の探索、花粉症に関する分析化学的研究やD-アミノ酸による生物系統樹解析など学生が興味をもちそうなテーマを学生とともに考えていくのだそうです。先生はまた、分離分析法の普及活動や社会貢献、さらに人材育成にも力を入れてこられました。これまでに各種分析関連学会の実行委員長を務められましたし、会員拡充委員会、産官学連携委員会、LC研究懇談会等の委員長として実行部隊の指揮を取られてきたのはご自身の方針によるのはもちろんですが、同時に周囲の人々からそれだけ強く推されてのことでした。若輩の筆者が言うのはやや憚られるのですが、中村先生の語り口には絶妙のバランスと含蓄があって、笑いの中に伝えるべき言葉がそれとなく伝わってくるのです。委員長として多くの人に推薦される所以でしょう。年会や討論会の折に会う中村研究室の学生さんたちが伸び伸びとしているのも先生の教育と語らいの賜物であろうと推察しています。これまで何度となく懇親の機会に中村先生と同席させていただきましたが、話題が豊富で話が面白く、その中に急に難しい言葉や故事などが出てきて、一瞬古武士の片鱗を見たような思いに何度となくさせられたのでした。

2009年度から会長職は2年間になり、中村先生には学会の改革期に重職をお願いすることになりましたが、実行力ある先生のことですからきっと周囲をまとめて本学会を牽引されていくものと期待しております。

〔東京化成工業株式会社 松本和子〕